

いけうち・おさむ 1940年生まれ。ドイツ文学者。エッセイスト。近著訳書に「ことばの哲学」、グラス「ブリキの太鼓」

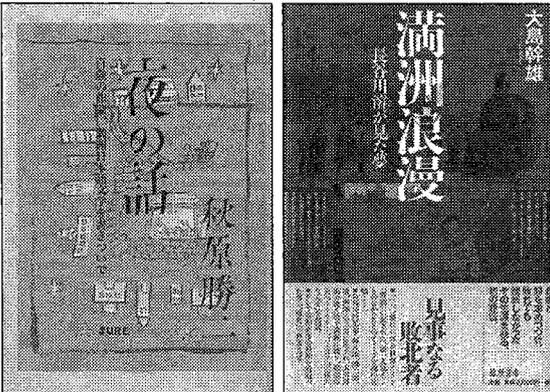
この欄は、南伸坊、池内紀、樺久美子、平松洋子の各氏が交代で執筆します

「満洲」という主題があった頃

池内紀の読書の部屋



『満洲浪漫 長谷川瀆が見た夢』
大島幹雄 (藤原書店/2940円)
『夜の話』
秋原勝二 (編集グループSURE/2730円)



「夜の話」は版元の直接販売のみ。問い合わせは編集グループSURE 075-1761111
http://www.groupsure.net

兄

弟何人かが活躍していると、きつとめだたない一人がまじっているものだ。昭和をいろどつた長谷川兄弟の場合もそうで、長男海太郎はペンネーム谷譲次、林不忘ほかを駆使して大衆文学で、二男瀧二郎は画家として、四男四郎は「鶴」ほかの名作をのこした戦後文学の旗手として名をなした。あいだにはさまつた三男瀆は、ひっそりと歴史からこぼれ落ちた。

「この放浪の延長に満洲行きがあったといつていいだろう」
若いときから多少とも向こうみずで軽率だった。長谷川兄弟には共通して放浪癖があつたようだが、大陸に渡つた三男坊は「満洲国」というカゲロウのような傀儡国家に自分の人生を見つけた。官吏として「王道楽土」の使命を担うはずが、即製国家のメッキの剥げあいで真相に気づいたのだろう。兄弟間で血の濃い「書く人」にめぐめて小説を試み、植民地文学の一翼に数えられるまでになつた。
タイトルは『日本浪漫派』になら

つた文芸誌『満洲浪漫』にちなんでおり、そこにいくつも佳作を発表、「満洲作家」としての地位を固めていく。だが巡り合わせの悪い人に運命はさっぱりほほえんでくれないのだ。満洲国消滅、内戦状態、さらに戦後の混乱が、おおかたを散逸させた。文筆家長谷川瀆の名は、辛うじてロシアの作家バイコフの「偉大な王」の訳者として伝わっている。額に王、首筋に天の字の模様をもつた虎王の一生を、大自然の姿とともにつづつたもの。

兄弟のうちのハミ出し者の人生を、愛惜こめてあとづけるなかから、昭和という時代がもつた夢と挫折と歴史の皮肉が浮かび出てくる。誕生から崩壊までの慌ただしさからして、つくられた国家自体が架空じみていたが、それが燃えるような夢想、また憧憬の的となつたことも事実なのだ。誇り高く満洲の密林をさまよっている虎と、影をひいた孤独人とが二つの写し絵のようにかさなってくる。
満洲文芸の発表誌の一つに、大連

で発行されていた文芸同人誌『文』があつた。長谷川瀆が戦後も、おりおりそこにエッセイを発表したのは、約二十年の中断のあと日本で復刊をみたからだ。

秋原勝二『夜の話』百歳の作家、満洲日本語文学を書きついで」は、十九歳のとき同人に加わり、以後八十年間、先には書き手として、後には同人誌発行者としてかかわつてきた人の小説、聞き書きをまとめたものだ。短篇のもつとも初期のものは八十年前、最新作は三年前の発表。文を作るといふことの原点を針の先で指し示したような作品群である。およそ類のない創作のあり方であつて、ある強い意志にすらぬかれていく。作品と聞き書きのあいだに「秋原勝二に関する満洲地図」がはさまりこまれ、旅順、大連、奉天、新京といった地名が見える。地理上の名称である以上に、そこに人生を託した人たちの存在のあかしでもあつて、インクの先のペンの動きが南満洲鉄道(略称満鉄)と国境という動脈・静脈の脈拍をとるのにひとしかった。

女 治的要素を持つ平和賞は別

幸

白

と黒の二色しかないような
坂山の町オリエーロスで十

広い世界がある」と知つた瞬間
や、「生まれてはじめて時間が過